

番号	コード						名称	所在地	年代		由緒由来の概要	資料名				
	町名	有形・無形	現存・非現存	大分類	中分類	和暦			西暦							
1	1	日高町	1	有形	2	非現存	1	産業	2	林業	森林電話	不明	昭和6	1931	右左府森林防火組合が有事に備えるために架設した14kmの電話線で、森林電話としては本道初であったが、電柱に鉄線1本を張ったもので、雨季になると通話できなくなり、昭和13(1938)頃、撤去された。	日高町史
2	1	日高町	2	無形	1	現存	1	産業	2	林業	坂本組	右左府	明治42	1909	王子製紙苫小牧工場が明治43(1910)に操業を開始するのに先立ち、その原木の供給地を沙流川源流に求めたが、その伐採と運材事業を請け負った。 岡春部3号の沢で伐採を開始したときは、10人あまりの人手を使役した小規模なものであったが、明治43(1910)には川をせき止め水量を見計って一度に流出させ、原木をその勢いで本流に押し流すため「鉄砲堰」を新設するなどして、坂本組の造材事業は千呂露川流域まで広がった。	日高町史
3	1	日高町	1	有形	3	不明・その他	1	産業	4	商業	北尾雑貨屋	ベンケ	明治42	1909	現在の日高町市街地の始祖とも言える北尾安治が開いた日高町最初の店。開店当初は、塩、むしろなどわずかな商品だけであったが、開拓期農家の必需品ばかりであった。それまでは、占冠、金山方面まで買い出ししていた。	日高町史
4	1	日高町	1	有形	2	非現存	1	産業	5	工・鉱業	釜石鉱山	千呂露	大正6	1917	大正3(1914)、千呂露川沿岸でクローム鉱脈が発見され、岩手県釜石鉱山田中製鉄所が採掘に着手。後に三井鉱業に経営権が移され、戦時の軍需資材として需要が増大し、隆盛したが、昭和20(1945)の終戦を境に衰退し、昭和22(1947)に廃止された。	日高町史
5	1	日高町	1	有形	1	現存	1	産業	7	道路	沙流川右岸道路	岩知志～右左府	昭和7	1932	岩内・三菜頃から右左府間の左岸道路が難路であったため、道庁が昭和3(1928)に工事を着手した。昭和7(1932)に完成したが、落石、なだれが多発し、冬期間はよく不通となった。昭和28(1953)に国道237号に指定され、昭和43(1968)から大改修が行われた。	日高町史
6	1	日高町	1	有形	3	不明・その他	1	産業	7	道路	右左府(うしやっぶ)橋	右左府	大正2	1913	三菜頃～右左府間里道の最終事業として架設された日高町管内最初の沙流川架橋、キングトラス式。	日高町史
7	1	日高町	1	有形	3	不明・その他	1	産業	7	道路	沙流川左岸道路	仁世宇～右左府	明治42	1909	木製材の運送等のために、道庁が開設した道路で、明治42(1909)に平取・仁世宇間、明治43(1910)に仁世宇・岩知志間、大正2(1913)に岩知志・右左府間が開かれたが、駄馬がやっと通れる程度のものであった。	日高町史
8	1	日高町	2	無形	3	不明・その他	1	産業	7	道路	クルミルート	占冠～右左府	明治37	1904	日露戦争がおきて、銃床に使う良質のクルミ材の需要が高まり、柚夫が金山から占冠に入っていたが、その後右左府に延びていったが、その際の道路を「クルミルート」と呼んだ。 日露戦争が終わって、クルミブームが去り、柚夫たちは引き上げたが、目曲久助だけが千呂露に止まり、日高町を開拓した。	日高町史
9	1	日高町	1	有形	2	非現存	1	産業	8	その他陸運	千呂露(ちろろ)駅通所	千呂露	明治43	1910	19世紀の初頭、江戸幕府が蝦夷地を直轄した時代に、会所や運上屋が整備され、送込、人馬継立、宿泊などの駅通業務を行ってきたが、開拓使時代以降にも駅通所が設けられ、取扱人をおき、手当てと官馬を支給し、旅行者や開拓移民の拠点として、また、各地域間の通信業務を担当してきた。 千呂露駅通所は、客室8畳2間、6畳2間、外に管理人居室、台所など土台つきの本建築で、当初は官馬が3頭であったが、後に私馬も数頭準備していた。沙流川流域の駅通所としては終着であり造材関係、鉱山関係、行人人などが常客であった。昭和2(1927)に設立された三国横断バスなどの輸送力の増加により、昭和14(1939)に廃止された。	日高町史
10	1	日高町	1	有形	2	非現存	1	産業	8	その他陸運	右左府(うしやっぶ)駅通所	右左府	明治43	1910	19世紀の初頭、江戸幕府が蝦夷地を直轄した時代に、会所や運上屋が整備され、送込、人馬継立、宿泊などの駅通業務を行ってきたが、開拓使時代以降にも駅通所が設けられ、取扱人をおき、手当てと官馬を支給し、旅行者や開拓移民の拠点として、また、各地域間の通信業務を担当してきた。 右左府駅通所には、官馬3頭と、私馬7頭がおかれ、岩知志、千呂露、占冠の間の輸送にあたった。主の客層は、造材関係者、役人、行人人などであった。昭和2に設立された三国横断バスなどの輸送力の増加により、昭和12(1937)に廃止。	日高町史、新門別町史中巻
11	1	日高町	2	無形	2	非現存	1	産業	8	その他陸運	駄賃馬	岩知志～右左府	明治末?	1900前半?	沙流川は断崖の奥深く蛇行する難路が続いていたため、物資の運搬は人手によっていたが、余裕のある人は、現在のレンタカーのように平取町の岩知志駅通所で馬を借り、荷物を積んで日高町の右左府駅通で乗り捨てていたが、これを「駄賃馬」と呼んでいた。 また、人と馬を雇って荷物を運搬するのを「ダンゴ馬」といい、造材業や鉱業が盛んになるに従い、農家の副業として大きな収入源となった。	日高町史
12	1	日高町	1	有形	2	非現存	1	産業	9	水運・海運	右左府(うしやっぶ)渡船場	右左府	明治41	1908	当時、平取から右左府までの往来には、5ヶ所の渡船場を使用しなければならず、そのうちのひとつで、初代右左府隊長などを務めていた夏川政五郎が私設したもの。初めは、丸木舟で楫一本で急流を渡ったが、危険が多く、まもなく対岸に針金を張り渡し舟を繋いだ。 明治42(1909)には、公設に移され運営されていたが、大正2(1913)に右左府橋の架設により廃止された。 また、この他に、明治45(1912)には三菜頃にも開設され、沙流川右岸を通って右左府に行けるようになった。 川の兩岸を滑車のついたワイヤーで結びたぐり寄せながら渡っていたが、昭和18(1943)に完成した右岸道路に三岡橋が架設されたため廃止された。	日高町史
13	1	日高町	1	有形	1	現存	2	宗教	10	寺社等	閑山寺	日高341	明治44(創基)	1911	日高町最初の寺院で、初代住職二宮定賢が、明治43(1910)にウジャップ(日高町日高)に民家を借り、明治44(1911)に曹洞宗説教所として設立認可されたのが始まり。昭和6(1931)、現在地に新築移転した。	日高町史
14	1	日高町	1	有形	1	現存	2	宗教	10	寺社等	浄教寺	右左府	明治44(創基)	1911	大谷派の僧侶高淵義が住本堂兼庫裏を建立し、真宗大谷派説教所として布教を始める。 大正15(1926)に火災で焼失し、昭和2(1927)に本堂庫裏を建築して再起したが、昭和9(1934)、再び火災で焼失する。 昭和21(1946)、現在地に本堂、庫裏などを建立し、現在名に改称。昭和45(1970)に本堂、昭和47(1972)に庫裏納骨堂を改築した。	日高町史
15	1	日高町	1	有形	1	現存	2	宗教	10	寺社等	千坂神社	千呂露	明治43(創基)	1910	日高町の発祥地である千菜部落の守り神で、町有放牧地内に小社宇と地鎮社を祀ったのが始まり。 大正10(1921)、現在地近くに千呂露神社の名称で、新築移転した。昭和18(1943)、現在名に改称したが、昭和35(1960)、日勝道路建設予定地コースに触れたため、約20m離れた現在地に移動した。本宮は一間社流れ造り様式による日高町唯一の本格的木造社寺建築物であることから、平成元(1989)に町の有形文化財に指定された。	日高町史、管内概要ひたか
16	1	日高町	1	有形	1	現存	1	産業	11	碑・像等	日高町の開拓目曲久助の入地跡碑	千栄	不明	不明	明治38(1905)、この地に居を構え日高町開拓の基礎を築いた岩手県人目曲久助を記念する碑。	日高支庁HP
17	1	日高町	1	有形	1	現存	2	宗教	11	碑・像等	岩内不動尊	三岩	明治末～大正初期(創基)	1900前	不動の滝の横の巨岩の3.3mほどの洞穴に不動尊像が安置されている。 閑山寺を開創した定賢和尚が、夢の中で、天女が羽衣を下げたような滝の下に座っている不動尊の姿を見て、おそらくお告げであろうとして富山県の工主に不動尊像を彫ってもらい祀るようになった。現在の堂宇は、昭和28(1953)に建立されたもの。	日高町史

番号	コード						名称	所在地	年代		由緒由来の概要	資料名
	町名	有形・無形	現存・非現存	大分類	中分類	和暦			西暦			
18	1 日高町	1 有形	2 非現存	1 産業	15 人物	目曲久助	千呂露	明治8～?	1875～?	日露戦争の勃発によって銃床材の需要が増大し、その材料であるクルミを求めて日高町に来た多くのきこりの一人、日露戦争の終結後、明治38(1905)頃に金野源八郎の説得もあって千呂露に入植し、日高町最初の徴をおろす。	日高町史、日高開拓功労者事蹟録(上)	
19	1 日高町	2 無形	1 現存	5 伝統	16 民話・伝説等	沙流山中の巨鳥	-	-	-	昔、日高沙流の山奥に片羽根の長さが約27kmもある巨鳥が住んでいた。巨鳥は時おり人里に現れて人や動物を襲い、畑を荒らすなど粗暴のかぎりを尽くしていたので、里の人々は退治に乗り出した。コタンから選ばれた二人の勇壮な若者は、鹿の革40枚と鉾を持って山奥に分け入った。二人は山の上と下に分かれ、片方が一まとめにした鹿の革を山上から沢に転がして巨鳥を誘い出し、もう一人が鉾で不意打ちするという計略を立て実行した。見事に罠にかかった巨鳥は降参し、「宝物を差し出すから許してくれ」と頼んだが、勝利に酔いしれた若者は情をかけず巨鳥を殺してしまった。巨鳥は昇天してからも若者が許してくれなかったことを悔やみ、ホウエという神様に「沙流部落にあだ討ちをしてください」と頼んだので、コタンの人々は散々な目にあったという。	日高町史	
20	1 日高町	2 無形	1 現存	5 伝統	16 民話・伝説等	トバツミとエベタム	-	-	-	昔、「トバツミ(宝物を狙う群盗)」と呼ばれる一群がおり、各地のコタンに攻め入っては宝物を略奪していた。ある日、沙流川を下る途中、オタレオマップ(旧岩知志駅連の下方)にアイヌのチャシを見つけたトバツミは攻撃をしかけた。この時、コタンの人々は獵に出かけており、チャシにいたのは留守に残った老婆一人だけであったが、冷静な老婆は身の危険を感じながらも、アイヌが最も恐れている妖刀「エベタム(物を食う力)」のことを思い出し、そばにあった目釘の線んだ鉾をカタカタ振った。エベタムはトント(細い革)とともに箱に収めておけば、カタカタと音を立てながらトントを食べているが、時には抜け出て人を襲うといわれており、老婆の心算どおり鉾の音をエベタムだと思い込んだトバツミは青ざめて逃げ去った。帰ってきたコタンの男達は、この始終を聞いてトバツミを追跡し、オフイタカリ(後から矢で射る)で矢を浴びせ全滅させた。以来、その場所はルエツ(足が狂う、よろける)と呼ばれるようになった。一方、エベタムは、あまりにも危険なため、タンネサラ(長い湿地、現在の荷負)のチェスト(浮島のある底なし沼)に捨ててしまったといわれる。	日高町史	
21	1 日高町	2 無形	1 現存	5 伝統	16 民話・伝説等	沙流川の魔魚	-	-	-	沙流川の源に大きな池があって、大昔巨大な魚が住んでいた。この大魚は、池の岸辺に来たシカや熊だけでなく人間も呑み殺した。舟一杯に乗っていた多くの人々を船もろとも丸呑みにしたこともあり、祖先たちはこの魔物を殺そうとしたが、ついに殺すことはできなかった。その時、神様が特別に蝦夷地を守る理由で天から舞い降り自らの爪でこの魔魚を捕らえた。魔魚は一生懸命に水底に沈もうとしたが、神様は力を尽くして陸に引き上げ、祖先たちは刀を抜いて魚が息絶えるまで切りさいなんだ。	日高町史	
22	1 日高町	2 無形	1 現存	5 伝統	17 祭事・芸能	日高町木やり保存会		不明	不明	丸太開拓時代の木材搬出技法を今に残すもので、日高町で開催される樹魂まつりで披露されている。	日高支庁HP、日高町役場、ほっかいどう芸術・文化活動団体名鑑2000年版	
23	1 日高町	1 有形	1 現存	4 教育	99 その他	日高町郷土資料館	右左府	昭和50	1975	昭和45(1970)に、北海道が開拓記念館に収蔵するための資料を収集するにあたり、町民に呼びかけ提出されたもののうち、開拓記念館に引き取られずに残された品物を柱として、それらを収蔵するために日高町開基70周年にあわせて開設された。	日高町史	